



青橋
半化通

後部 應 契 卷



上
土
紀

海
鏡
石

定價 三 匁 五 厘



青樓半化通上之卷

寓言

服部應賀著

夫衣紋坂の柳四方不靡ども此頃市中の垣衣
 不其色を奪きて五葉の松も席内不根と張ざれ
 不二階三階の枝葉不緑り茂るの水揚もなり
 大門の地獄の罪人を待たぬや更不鐵の堅固
 不建構けるが閻府の冥官觀鬼嗅鬼不附て鏡
 札を去る浄頗梨の鏡不向いせ業の秤不を掛



とくども方今旧例あつては罪人極樂に
活業を懇ふ論さる元火宅へ蘇生らすれ
此川竹の苦界に沈て泥水を吞亡者一人も
れが衣々をつら明烏の頭いまど白くあつ
鐘の上野も浅草も六時が居續して外
定あつて暦とかりん細見もやの晦日月と
見は四角の玉子の厚焼くめ開化を轉る吉原
雀大酔ふ入て夢ふ化して蛤しかり忽ち小洋
形の新規樓を吹建けまが此廓の苦勞と保食

黒郎助殿此先の苦勞と助る見留め付ざら
とて吉徳強カ殿の異見小付て吼々ちねと立退が
跡小和光の宝珠ゆる旭の尊像も今大見世の
主人も三階五階を持るが何の無陀如来
と拜む時世とい言るが斯る縁もさ衆生ハ
度がさりと遂小大音寺の蓮臺小轉坐すれ
ハナつふんも又肉食妻帯の腥と香花小鼻
をさるゑん飲菜浄土を念ふも衰微ハ四宿
由一畑ささむが是ら田を行由畔を行由かほに

一連 託生 かりし 旭丸屋の印をば 解て 拳小悟
道の汗を握る 穴賢 叔秋葉の燈明 臺を
いまだ 洋人の渡来る 代小半 髪の小鬚
鼻の先を三尺 棒より 高く 築て 諸港の明に
魁して 能ライラン 海の闇を照せし 衝突此
患ゆ かく 上氣の先頭 多く 船を 山谷 小繫
けを 上陸 護送の 提灯 持て 日本 堤小絶
ざりしが 火防の 神燈 由天 降を 火の雨
防が ごとく や 過年 水道 尻小火 付て 尾解

の跡 由失へば 其光を 馬道の 時計屋の 戸外
小移を 是ハ元 傾城 界小立て 放蕩 戀暮の
闇を 照せしが 今も 又 開明 進歩の 人と 照
すを 煩悩の 犬猫の 眼 知や ぬや 仰
光陰の 運轉を 矢を 射より 殊小 早々 ねば
一時を見 うちふ 二時 小ふり 昼と あり
夜と あり 今日 といふ 小盟 日となり 一月二
月ハ 夢の間 あり 嫁が 姑小 成か なるの 遅
きや 心 脚も 早一 譬へ 千万金を 積とり

とも光陰の脚をうりぬ五厘も止らぬことを示せば
或夜此時計屋の前まで素見空過小鼻唄
て来りし者此時計の針の運を詠て遊戯の費
を自りささしり其処より直小家へ戻りて夜業
の燈火小附しとわりしが是等の開明の光を見
て開明小進歩する難有人ある事とも多くも身
上志すべの懶惰者の中小学書も達者なれど
由身の行ひの悪きものも零落居を志すべ親
の難美妻子とも顧び他の金錢を自りぬ湯水の

如く小遣ふあまは又其朋友とて其非美を諫むる
是を幸ひ小不正の品と知る質入の仲立採りて悪
処へ連立此奴等の鮑魚小集る青蠅あま論せば
及て仇と為る大飯を喰ふ毒虫と見殺て天の網小
かゝるを見よ都て人の且小起夕まぐ稼でさ一胡の
活計の難きものを五錢七錢の儲さく出来ぬ身か
他力の金錢を費して後小譬改心を志すべとて人
あゝの寿の限りらまが空遣の金錢一代の中小取之
まゝとあまさやまは一度の過一世の大瑕となすを

陀女小よ来ら



此女来ハ下々
衆生ニ思縁
アカク亡者ノ
流勘定ニ
身ミハスレバ是ヲ
已身ノ無陀トモ云

一切經一分
四貫文の説

下品下娼

三品さん無む



中品中娼
此女来ハ中等ノ
煩惱買テ照シテ二階
三階ヲ持ト云

上品上娼

三分經の説

此女来ハ上等ノ
縁客ヲ済渡シテ五階ヲ持シム

ト云

上品上娼

福者の貪賤小終るの皆此光陰を去るぬがウへる雨爾る
 小難有也追々学校盛不かり市中見巡の燈火
 庶人の善惡を明く小照せ彼懶惰者の中不逼
 迫て晚時るる蕃椒のやうる筋をあつて
 人力車を引ゆつり又土番を荷ゆあまが自然
 田町の掛行燈ゆ薄闇あり花街の万燈ゆ既に
 消ふんとせしが舶来の石油全盛を次足ランプ
 乱婦ゆ又連々と夜景を持直して心底の水臭
 へも客小チヤ火家油を浮せて盲時計の懐を

照し牛肉の且那馬車らくくまぬ茲小光陰を費せ
 一椀樓の油断忽大敵とあつて終小牛馬解放の
 筒袖小むくつて怖玉げ銃見せゆ又半焼小夢野
 となり紙を喰さく牝鹿失まば夢をむきぶ牡
 鹿由来ぬゆ遣手の鬼を角を折薺花の弦番
 の家根小茂る翠帳紅閨小枕並べ一全盛ゆ吉
 野竜田の花紅葉ゆ夢と覺てハ跡ゆみやと哀
 傷を調まが二挺の鼓ハ簾輪狸の山彦とまり一中
 河東の猫の皮ゆ紙袋を冠らまて戸棚の隅に

ニヤンの音もどさねが鐵漿漬小足を洗ふ幫間
虫もつる中へ又そろく藻小住虫のこまろく立
戻る出稼小父母意一と鳴音いあまども今日
當家小網ををろ翼日ハ隣へ巢をかゝる女郎蚊
の自由より亡八虫の泣面を八人九人の一坐あ
ても廣ひ籠小玉虫く移夜明を獨り待ひ
たり斯る淋く秋の夜小又圓々女の沢山あるを
是一六の日小限がゆへ其園々のどんと澤山のた
を採て一六閩澤と藝者小謡いせてどんとを永

く願へどの奢者ハ久くく人めも意草も冬枯
往来ハ廣くあるまども商賣ハ狭くあるより外の藝
者と船宿の苦情の争ひ傳流して廓小茶屋と
貸坐敷の苦情の争ひ發り元より合持の生
活みれば間もあく和睦小なる上の合互小凋む花の
渡世を閉く時節もよると旧曆の弥生小中絶の
桜を植込けまば其景色昔小由劣らぬがゆへ何人小や
花の枝小○春宵一六櫻價千金とあうくを見て皆々
悦び此花今小盛しあう一六の日の賑ひいどのやふらう

ぞと指折かどへたの〜四月下旬の六の日も爛
燭と花の意情も翻かきて客を待し小豈斗らず
後より風雨烈しく電ひつめれた眩も浅草の空小雷
つよく破々る閨澤連中此けんましく小肝をひやして
元雷門のおさうより人カ車小飛乗て家路へ去る者
多々まひ今を盛の花の廓も待客い来せば小待ぬ
雷の声小怖て皆戸をさして失志多か粵に猫屋又
六といふ茶屋の主漸く雷の遠く鳴を聞きまゝ二階
の雨戸を押あけて見ればけろろんと月さぬとわ獨

夜桜を御見物みされば猫又恨りげ小空を詠て獨言
小元よりどんとを目的小植し一六櫻もまが雷の太鼓
持せめんどんと叩ひてらるるべどんとくの人寄し
ゆあふまき小虺々カリくといろけのるひそゆごろく
かりくハ茶屋高賣小大禁物其上閨澤様を追ち
ずのこあふば人カ車小銭をどせか宅へ帰らかへらぬ
ち小又此や小空を晴しえ銭ゆあひ月や星小素見
ささるゆ忌りき。斯花を見捨る野暮る風雷神此地
不あるとも又吉野小花を愛護の御神あり其上吉原と

目	六	平	才	合	眼
京	東	全	童	入	入
書	車	車	下	必	必
林	二	二	門	對	對
	第	第	合	國	國
	四	四			
	二	二			
	丁	丁			
	日	日			
星	野	私	吉	野	野
理	之	陪	田	之	之
下	報	應	香	報	報
公	齋	德	外	齋	齋
碑	德	茶	外	德	德